

板谷波山伝

松田典子

(第一回生)

伝記

板谷波山は明治五年(一八七三)三月三日、茨城県真壁郡下館町宇田町で、板谷増太郎の三男として生れ、名前を嘉七といつた。

下館は木綿の産地で町人を基礎とした文化が江戸時代に盛えた町であつた。このような環境において波山の家は醬油醸造業を営み、かたわら商店として雑貨もあつかい相当な旧家であつた。父増太郎は鬚髯をたくわえ、商人らしからぬ風貌をしていた。しかし商才にたけなかなかの人物であり、また半癡と号し文墨の道をたしなんだ。また茶道、三味線をひき、和歌や狂句も作つた。一方器用で指物や袋物なども作つたりした。殊に南画は幕末の著名な南画家高久靄厓の流れを汲む富川大塊について学び、素人はなれをした腕であつた。

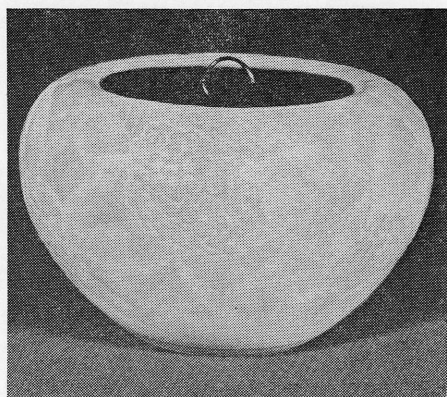
波山も父の芸術家的資質や器用さを多分にうけついでるのであろう。しかしその父も明治十五年(一八八二)五十五才で世を去つた。波山数え年十一才の時であつた。その後波山は母宇多の手によつて、嚴格に育てられた。母は波山に廊下の雑布がけを日課としてさせた。このような少年時代のしつけが後の波山のねばり強さとな

つて出るのである。波山数え年六才(一八七七)の時下館の田中小学校に入学、明治十二年(一八七九)下館小学校に転校した。小学校では成績抜群で首席を通した。なかでも図画は最も得意で常に教師を驚かせていたという。同十八年(一八八五)卒業と共に水戸、真岡などの商店に奉公に出されたが性に合わずやめた。それは波山の性格が人におじぎをすることを嫌い、外見はおとなしうに見えたが何か一本強い物があつたのである。後にこの波山の性質を知らず波山をあなどり、高飛車に出たために反撃された者も少くないとか。しかし波山は身分地位財産などによって人に差別を加えることはなかつたようで、だれに対しても同じように丁寧であつた。又一方このような性格が後に生活困難に接した時にもあらわれ、家族はずいぶん苦勞したらしい。十六才で軍人を志し上京したが体格検査で失格し希望を断念せざるをえなかつた。そのため当時陸軍士官学校の予備校と見られていた成城学校を退学し、一年ぐらゐらぶらしてゐた。そのころ本郷の下宿の附近に河久保正名が画塾を開いた。

河久保は国沢新九郎門下の洋画家であつた。波山は時おりこの画塾をのぞいてゐるうちに画を描きたくなつたので、この塾に入って鉛筆画や水彩画を描きはじめた。そのうちに新聞で東京美術学校の生徒募集の広告を見た。波山は陶磁をやりたいと思つてゐたが、陶磁科の開設は将来にまつことを知つて、彫刻科に志望した。これが後の作品に大きな影響をあたえ、するどい線刻となつてあらわれる基礎をきざしたのである。この年波山は数え年十八才であつた。波山は小さいときから焼物に興味を持ち、小学校を出る頃、筑波の麓に陶工がいるのを聞いてわらじがけで訪ねたことがあつた。

「私の父はいささか茶道のたしなみがあったので私は幼時から陶器や諸道具に接する機会が多かった。そこで小さいときから、焼物とは尊く美しいものだという印象が頭にしみついていった」（東京タイムズ昭和二十八年十一月二十二日）と後年みづから語っている。

東京美術学校は明治二十三年（一八八九）二月に開校され、当時は普通科二年、専修科二年の課程であった。波山は晩年にいたるまで「あのころはよかった」となつかしそうに東京美術学校時代を回想していたそうである。それは波山の青春をたぎらせた時代であったばかりでなく、当時の美術学校は、校長岡倉天心の統率のもとに、官立の学校としては、異色ある校風をもっていたからである。



指水花陽紫磁彩

フェノロサや岡倉天心のプランによって、もっぱら国風美術をおこない、絵画では日本画、彫刻では木彫の教育が行なわれ、専修科ではそれらの他に美術工芸として彫金と蒔絵があった。普通科では絵画科の生徒も彫刻を行ない彫刻科の生徒も古画の模写などを行なわなければならなかったようである。波山も彫刻科で色々

な事を学んだので後の作品にみるような見事な圖案構成が出来たのである。

在学中は独創を奨励する天心の方針のもとに自由に自己の才能をのばし、卒業製作には元禄美人を造り上げ、明治二十七年（一八九四）七月二十二才で卒業した。この製作に当っては自分自身元禄若衆の姿をしてみたり、また、たまたま学校を参観に来た天心の令嬢を、それとは知らず、髪形を觀察し、その上粘土で汚れた手でさわってしまったという話が残っている。製作に対する打込みよう、熱心さがうかがわれる。

美術学校卒業後は、美術学校受験生のための開成予備校で彫刻を、また芝の攻玉社中学校女子部で図画を教えていた。

明治二十八年（一八九五）数え年二十四才のとき、福島県河沼郡坂下町の呉服商鈴木作平の娘さんと結婚し、本郷森川町に新居をかまえた。夫人は高い教養と女性のたしなみを心えた人で刺繍や閨秀画家跡見花蹤について日本画を学んだ人であった。

明治二十九年（一八九六）九月、波山は金沢の石川県工業学校に就職した。これは工業学校の彫刻科主任であり、先輩であった白井雨山が退職するに当って、波山が焼物に興味のある事を知って推薦したものであり、波山もこれを良い機会と思つて、当時大阪の工業学校の図案科に勤めることになつていたのである。

石川県工業学校ははじめ金沢工業学校といひ明治二十年（一八八七）我国最初の公立中等学校として創立されたもので、当時は絵画、彫刻、陶磁、描金、髹漆、染織の六科がおかれていたのであるが、三十一年（一八九八）からは絵画、陶磁（後窯業科と改称）、漆

工、染織、金工の五科に改められ、波山が主任をした彫刻科は廃止されてしまった。そこで波山は辞職して帰京する事にしていたのであったが、学校の熱心なすすめで陶磁科の先生として留まることになり、ここにおいて波山の大きな変化すなわち生涯をかけた焼物との結びつきがはじまることになったのである。

いわば素人であった波山が、九谷焼で知られる金沢で陶磁のことを教えるのであるからなみなみならぬ苦労と勉強とが必要だった。

教えるためには本格的な研究をつまなければならなかったし、実習指導の職人とともに坯土のこと、醃鹽、窯焚きなどの製陶に関するあらゆる技術を習得、研究し、また石川県下をはじめとし、京都、瀬戸などの製陶地に赴いて研究を積んだのである。今日残っている当時の写生帳や意匠などの資料収集帳ともいべきものを見ても、動植物の写生から、いろいろな陶器その他の工芸品などを意匠したことが実によくわかる。

明治三十一年、二年から大日本窯業協会雑誌にしばしば陶磁の図案を載せていた、外国のものの影響もあってか、その頃としては大変新しい意匠のものがある。

波山はその郷里下館を流れる勤行川の名からとって勤川と号していた。また模様集第二巻虚舟菴藏の文字が図案集の表紙にあり、図案「野乃花」の下部にも「虚舟菴」と書いてあるところから、若い時代には虚舟菴の別号をもっていたのかもしれない。

また金沢時代には「童子象」という兄妹がよりそっているかわいらしい彫刻を製作している。この作品は現在も石川県立工業高等学校に残っている。

金沢生活は波山にとって土地柄も人間関係でも好ましかったらしい

い。「金沢の思い出」という本の中の波山自身の文章によっても、それがうかがえるのである。あまり自分で書物を出版したり書くことを好まなかった波山が、こうした本を書いたことからいかに金沢時代が波山にとって意味深いものであり、生活しやすかったかという事が想像出来る。この金沢で学校にそのまま勤めていれば平穩な生活が出来たのに、焼物の勉強、研究をかさねた結果、波山の製陶生活への決意となったのである。

後に波山を後援した当時の県視学色川箇士の「目的貫徹のため、明日から食えなくなるのものともせず、職を辞するのが勇退だ、大いにやれ」との送別会での激励の言葉をあとに、明治三十六年（一九〇二）八月、石川県立工業学校を辞職し、同年九月に上京した。

波山が上京したとき、持っていた金は退職金の二百三十円しかなかった。実家の姉婿から金のである望みはたたれていたし、お金を出してくれることになっていたまる夫人の義兄も、運わるく急性肺炎で他界した。このように上京はじめに波山は築窯にさいし、独力でやらなければならなかったのである。後に波山の話聞いてみると、たとえお金を借りられても独力で窯を建設したであろう。波山の人柄からしても自分にきびしい人であり頭をさげるのを嫌う人であったから当然のことのようにも思える。

波山は退職金を投げ出し、まず家と窯場の小屋を建てようと、美術学校時代の知り合いの大工に頼んだそうである。その大工も昔気質の人で、彼の心意気を感じて、義侠心にとむ職人気質で引き受けてくれた。それが現在の東京都北区田端町五一二の極めて粗末な家と窯場小屋で、三十六年（一九〇二）十一月に移った。このころか

ら彼は勤川の号を波山に変えていた。これも郷里の名山筑波山からとったものである。

その時幸にも波山は東京高等学校窯業科の嘱託となり週二回教え三十五円の月給をもらうことになった。しかしその金だけでは築窯もできず、友禅染の図案を描き、中学校で写生のために使う石膏像などをつくったりした。また蔵前にあった学校に通うのに歩いて交通費を節約するなどして一生懸命に資金をかせいだ。大正二年七月まで勤め、そのはじめの頃には教授の平野耕輔のマジョリカの研究、製作を助け、意匠図案及び成形彫塑の面で力を發揮した。後マジョリカの大きな影響を受けるきっかけとなった時期であろう。

マジョリカはルネッサンス時代にイタリアで作られた、すずの釉を用いた彩画のある陶器で、その製作技法は、素焼にした素地を、水にとかしたすずの釉の中に浸し、いったんかわかしてから、絵付けし、二度目の焼成によって完了する。

この田端に移った頃郷里に残して来た夫人と子供達を呼びよせた。

明治三十七年（一九〇四）、平野耕輔の指導によって設計された三方に焚口のある洋風の倒焰式丸窯を築きはじめた。仕事にかかってみると貯えた金ではとても足らず、内職の金が入ることに煉瓦を買って少しづつ築いていかねばならない状態であった。煉瓦も夫婦で車を引いて運ばなければならなかったし、丸窯なので扇形の煉瓦が必要であったが、高いので普通の煉瓦を夫婦で扇形に切つてまに合わせるといった状態であった。冬の夜などはせっかくならぬ煉瓦の凍るのを防ぐため、米俵でかこめばよいのであるが、それさえも買えないありさまであった。そこで夫婦の道具を窯にかけ、焚火をし

ながら夜を明かしたという。

生活の状態は米や味噌にも事欠き、うどん粉を丸めて塩水で煮、あかざの葉をまぜて食べたこともあるくらい貧乏のどん底にあったのである。しかし波山はこのような、苦勞、困難にも負けず仕事を続けた。たまたま美術学校時代の同窓生で、後に国宝彫刻修理の第一人者となった新納忠之介の厚い友情、援助などがあって、一年三ヶ月目に遂に完成したのである。

窯が出来上ると、有田の出身で高等工業学校窯業科助手で轆轤の名人であった深海三次郎が成形を手伝い、初窯にこぎつけた。といっても一窯を焼き上げるだけの焼料を買う金もなく、内職をしなから少しづつ買いためていったのである。お金に困った時波山は姉婿とは喧嘩をしたが決意をひるがえして強情な波山は姉にたのんでみようとして郷里下館に出かけた。その途中波山の人柄を思わせる事があった。伊讚美ヶ原にさしかかったとき、昔の荒地地は開墾され、立派な田畑に変わり、あちこちにきれいな農家が建っているのを見た。自分が子供の時見たきたない着物をきて、堀立小屋に住んでいた人々は今長年の努力が報いられ、豚までかっているのに、今自分の状態を考えて恥しく思い、姉の所でお金を借りなかつたという。波山はますますひどい貧乏にたえて窯を築く事に懸命となった。

このようにして明治三十九年（一九〇六）四月下旬、波山は祈りを込めて初窯に火を入れたのである。

この時の様子は薪を投げ入れ投げ入れ満一昼夜燃しつづけたが温度はあがらず、ここで火が止つてはこれまでの苦勞が水の泡である。薪が足りないという波山の悲しそうな叫びに、夫人が無理して車で運んで来た薪束を入れたがまだ足りないで、雨戸をこわして

窯に入れたがそれでも足りなかった。天井裏に石膏の空樽のあるのを思い出してそれを投げ込んでやっと焼き上げたという有様であった。

こうして苦勞に苦勞をかさねてようやく、焼き上がった作品は予想以上に好い成績であった。何が幸いするかわからないもので、普通窯を築いた場合には、湿気をとるために少くとも二、三度は空焚をしなければならぬ、波山の窯は築きあげるまでに二年もかかったので、すでに充分かわいていて空焚の必要がなかった。その時の苦勞を思つて、苦笑せずにはいられなかったと正木直彦「回顧七十年」にある。

作品は東京美術学校長の正木直彦氏に贈呈したほか、三点を日本美術協会に出品し、その一つは美術学校に寄贈し、一つは益田孝氏が買上げたという。

第二回の窯は明治四十年（一九〇七）に焚いた。予想通りに焼き上がったが、火をとめてからわずか三分後に地震がおこり、完全な作品はわずか一つしかとれなかった。他に多少傷があつても使えそうなものもいくつかあつた。家族の者は当時生活がひどい窮乏にあつたので残つた作品の活用を考えたが、波山は作家としての良心が許さぬとして家族を使い出してその留守に皆砕いてしまつたという。作家としての波山の厳しい心構えを示す話である。後の天目茶碗においても釉滴がうまくいかないと波山は思ったが、人々がその出来を高く評価したためにとても恥しかったとか。このような潔癖さ、厳しさは生來波山自身にそなわつていたものであり、終生失うことがなかつた。作品にもそれが端正、高潔さとしてあらわれているのである。

この第二回の窯の災難にもまげず、また貧乏とたたかひながら、第三回の窯に取組んだ。これがまた非常な好成績であつた。その中の一つ「磁製金紫文結晶釉花瓶」はこの年明治四十年（一九〇七）開かれた東京勸業博覧会に出品され、三等賞を得た。それまで無名であつた波山もはじめてその名を知られるようになった。

明治四十一年（一九〇八）日本美術協会第四十二回展に「磁彫獅子蔓紋花瓶」を出品し「新窯ニシテ此大作、品位卑シカラズ、進歩ノ実ヲ微スルニ足ル」との賞稱を得た。（同協会報告明治四十一年九月）翌年には同協会第四部の委員を委嘱された。明治四十三年（一九一〇）に東京府工芸展の審査員となり、四十四年（一九一〇）には全国窯業共進会に「白磁鳳凰文花瓶」「印甸文花瓶」「落葉文花瓶」を出品、一等賞金牌を受賞、九月二十七日会場に皇后陛下が来られた折、宮川香山の轆轤、堀川光山の楽焼、朝見翠香の絵付と共に波山は陶器彫刻による御前制作を行なつた。翌年の東京勸業博覧会には審査員となり、出品作「白磁八手彫花瓶」は東京府の買上げとなるなど、波山の真価は次第に認められはじめたのである（これは百円であつた）。

しかし平素の作品の価格は十三円であつた。大正三年にはサンフランシスコ博覧会が開かれるので、日本からも作品を募集したが、陶磁品、七宝硝子の部では九十七点応募し四十一点が入選した。波山は「禽果唐草文花瓶」「梨地釉花瓶」「笹葉彫刻花瓶」を出品した。この作品に見られるように波山は学校で学んだ彫刻と焼物と結びつけ、焼物に薄肉彫の文様を施し、日本陶磁器界に新しい道を開拓したのである。

この頃になると波山の苦勞した話は、新聞などによって伝わり、

陰となり日向となって後援する人も現れてきた。ある人は波山の製作の参考にするため、フランス美術雑誌を送ってくれたり、また波山の生活を安定させ、製作を援助するために、毎月会費を集め、作品を頒布する波山会も大正三年（一九一四）ごろにつくられた。波山は一時のどん底の生活からぬけ出すことが出来たが、多くの家族をかかえた生活は楽ではなかった。

その頃になっても波山は盛んに草花の写生をしたり、博物館をはじめ、道具屋で見たものから、雑誌類に載っている陶磁類まで細かく描き写している。また釉薬、技法などについても色々と工夫、研究している。生活は困難でも基本的な勉強は常におこたらず、全力を尽くしていたのがよくしのばれる。

生活の足しにするために波山は花見用の盃、徳利などを作り、田端駅近くの露月亭という休み茶屋で売ったこともあった。しかしほとんど売れないで、売れたのはわずか盃二個であったという。盃は白釉、黄釉をかけた簡単なものであったが、波山独特の形の端正さが見られた。波山はどのようなものを製作するにおいても常に心をこめて作ったことがしのばれる。

高等工業の嘱託時代、平野耕輔のマジョリカの研究、製作を助けた時、意匠、図案及び成形彫塑の面で力を示した。生活のためにマジョリカを作った事もあった。これには波山の名は入れず、妻まるの号「玉蘭」の印を捺していた。なお明治四十三年に轆轤をひいていた深海三次郎が中国に招聘されたので代って石川県小松出身の現田市松が助手となって勤めていた。現田は波山に養成された以後、波山の最晩年、五十余年間苦楽を共にした。

明治末期の日本陶芸界は日常の類は新たな機械生産形成を採用し

進展したが、いわゆる工芸作品はそうした影響や、意匠の行詰りなどで沈滞していた。殊に明治四十年（一九〇七）から開設された文部省主催の美術展覧会から工芸が除外されたりした。このような状態の時波山を先頭に、明治末期から高等工業や、美術学校、あるいは陶芸試験所などで学んだ人々によって、新しい陶芸の道が開かれようとしていた。殊に波山は懸命な研究、努力によって萌芽が見られた。大正二年（一九一三）から農商務省の主催によって工業展が開かれることになり、こぞって出品した。

この工業展は、はじめ図案及び応用作品展覧会と称し、産業振興を目的とし、図案の改良を中心としていたがしだいに図案は姿を消し一品制作が盛んになった。

波山も第一回に「莓実彫刻マジョリカ皿」図案を出品した。

大正三年（一九一四）春、東京府主催による大規模な東京大正博覧会が開かれ、波山は美術及び美術工芸の部第二十四類（陶磁器、七宝、硝子、モザイク、ステンドグラス等）の審査員になると共に「孔雀唐草模様花瓶」を出品した。同博覧会では「……東京板谷波山作孔雀唐草模様花瓶及び雉果唐草紋花瓶ノ二品ハ図様ニ東洋風ヲ採リタル構成ナレドモ作風ノ大体ハ西洋ノ風趣ヲ帯ビタルモノニシテ其ノ構図ノ佳良ニ製技ノ精巧ナル斯器類品中ノ優秀ナル逸品ナリ……」と賞讃されている。波山の名声はこの「孔雀唐草模様花瓶」の官内省買上げにより高まった。この年のサンフランシスコ博覧会には「笹葉彫刻花瓶」を出品した。

大正四年（一九一五）大正天皇御大典にさいし、波山は木彫の竹内久一、彫金の海野勝珉、鍍金の大島如雲などの大先輩に伍して陶工として選ばれ、浅草観音堂を製作した。この年のシカゴ万国博に

は「笹葉文大花瓶」を出品して受賞し、大正五年（一九一六）の日本美術協会展に皇后が来られた際、夫婦で御前制作を行った。翌年の同協会展には「葆光彩磁珍果文花瓶」により金牌第一席を得た。この頃には波山の工芸界における位置はゆるぎないものとなったのである。

波山はその潔癖な性格から榮達を求めのために自ら運動がましいことをしたこともなく、生活を省みず、研究努力を重ねた。旅に出て変った土があれば取って来て試験し、窯を焼くたびに、テストピースを入れ、たえず実験、研究につとめた。このような態度が波山に名声を与えたのである。その陰にはまた、妻まるの協力があつたのである。それが当時の新聞、雑誌などによって夫婦愛と喧伝されたほどである。

大正十一年（一九二二）に第一次大戦後の平和を記念し、併せて産業の振興発展を計り、平和記念東京博覧会が開催された。波山は当時の一流の工芸家として審査員を委嘱され「葆光彩磁柘榴彫文花瓶」を出品した。同博覧会審査報告に正木直彦が「審査官板谷波山ノ葆光白磁及彩磁ノ諸作ハ何レモ完美ナル大作トシテ異彩ヲ放テリ出品中旧来ノ陶磁製作ノ形式手法ニ拘束セラレザル自由意識ヲ以テ製作シタルモノニシテ特異ノ趣致ヲ看取シ得ルモノアルハ洵ニ喜ブベキ現象ナリト」賞讃し更に進展するものと大いに期待をよせている。このように波山は新しいものを造り出すのに意欲的であつた。色の取扱いがよく、ユニークな抒情詩的な訴えが潤んだ光の底に、文様は他には見られない創作性を示している。

大正十二年には摂政宮御成婚を祝し、久邇宮より献上の「彩磁瑞文花瓶」全国文武官献上の「彩磁松竹梅花瓶」を作つた。

大正八年文部省美術展覧会を新たに設けられた帝国美術院が主催することになったが、その時にも、工芸は参加出来ず、工芸家は参加を強く要望していた。工芸家の団結を必要とした時、波山をはじめ工芸の大家の運動がおこなわれた。済々会を結成し帝展参加を実現させるため各作家の力作を出品した展覧会を大正十四年（一九一七）に開いた。波山も「葆光彩磁草花文花瓶」「蛋殼磁燕鯛彫文花瓶」「紫金磁青花彫文花瓶」「紅粟磁花瓶」などを出品し、翌第二回は「果実彫文花瓶」「牡丹彫文花瓶」「葡萄牙香炉」「桃香合」を出品した。

大正十五年（一九二六）東京府美術館の竣工記念、聖徳太子の千三百年忌の奉讃を兼ねて、聖徳太子奉讃美術展が開かれた。その顧問に当時の一流作家の一人として波山も推された。工業界で最高の位置を占めるようになっていたことがわかる。波山は審査員にもなり「永華磁瑞花文大花瓶」「葆光彩禽果文大花瓶」を出品した。後者の作品は白磁に、藍、鼠、臙脂などの色絵具を巧みに配して、孔雀、瑞花文を描き、その上からマッド釉をかけた壺で、波山の精根をつくしたものであつた。奉讃展は工芸を絵画、彫刻と併列して扱い、帝展への工芸参加問題の解決策を具体化したものとして、社会的にも認められ、帝展第四部（工芸）設置の大きな足がかりとなつた。

大正の工芸界にあって波山は工芸の参加について直接運動を行うというのではなく、優秀作を作り出すことで工芸の地位を高めようとして、絵画、彫刻と併位し得ることを世に認めさせ、内容、質的な面から工芸の帝展加入へ大きな力を果した。

波山はまた大正期には次々と傑作を進展し芸域を広めた。その間

の研究、努力には並々ならぬものがあつた。青磁においても見事な作品を焼き出すようになった。明治四十五年頃から色々青磁について勉強していたようで、青磁を焼くと博物館に持って行き中国青磁の名品と並べ比べて研究していた。殊に文様では染織の文様の研究、更紗文様、インド更紗、オランダ更紗などを折りあることに研究していた。この波山の更紗文様の研究は、明治の中頃から行詰りが感じられていた陶磁の文様の改良に大きな役割りを果し、陶磁に新風を吹き込み、活気を与える大きな力となつたと注目される。

波山の特色の一つである薄肉彫文様は、波山が学生時代に学んだ彫刻の技を焼物と結びつけ、大正期にはその刀の冴えを見せるようになり、この時代の作品に多く見られるような端麗、高雅な作風を作り上げた。

また波山は薄肉彫文様とならんで、葆光彩磁にすぐれた。この葆光彩磁を完成するまでに波山は心血をそそいだ。

葆光彩磁という名は大正のはじめから見られるが、葆は「つつむ」「かくす」とかいう意味で、葆光は「うつつらと光沢ある」の意味を示し、マット釉である。このマット釉をかけた彩磁は波山の創造になるもので、明治の終りから試みていた。色調が薄絹をすかして見るようで、やわらかく、品のよい、焼成品が示す美しさの中でも、長谷川等伯の絵に見られるような、日本特有の高湿の風土に合った表現が好まれるのであろう。その独特な美しさと格調は近代陶芸を大きく飾り、大きな影響を与えたといえる。制作にあたっての苦心を鷹巢豊治氏が述べている（陶説八二）。

まず波山の指示によって出来た生薬地の器物に彫文様を施す。こ

れだけに一カ月から二カ月位かかるが、もろい生薬地だけに破損しないよう神経を使うだけでも容易ではない。文様が出来上がると、素焼し、これを青磁、白磁とする場合はそれほど面倒ではないが、文様を下絵で彩る場合には複雑な彩色法が施される。これが普通の下絵では顔料が表面に付着するだけなのに、波山の彩釉は素地に浸透して裏にぬける性質のものでこれを防ぐために、器の裏面から油質のもので塗りおさえ、更にその上を「ラック」質の塗料で塗り、色の浸透を完全に防染する。

昭和二年（一九二七）第八回帝展にいよいよ第四部として工芸が参加することになった。これは明治四十年（一九〇七）第一回文展が開催されて以来の工芸界の願望であり、工芸が絵画、彫刻と比肩し得ることを世に認めさせることで、長い苦難の道を経て勝ち得たものであつた。波山は彼の優品を世に出すことにおいて、こうした結果をもたらす上に功績を上げたといえる。日本の工芸家たちは非常な意気込みで参加した。

波山はこの第四部設置の委員であり、また、その審査員に推された。作品の傾向は独仏に流行した構成派的な模倣作が多く伝統的なものは少なく政府の催す展覧会としてどうであらうかという説もあつて論壇を賑わした。出品中鍍金などに比して陶磁は余り振わなかつたようであるが、波山の「紫金磁珍果彫文花瓶」は端正な作行、優れた技巧により特に好評を博し、翌三年も続いて審査員となつた。この時も波山の「草花文彩磁花瓶」は優れ、第四部初の帝國美術院賞を授与された。この花瓶は茶壺に似た形で、胴に写實的に表わした瑞花が、巧みに巻きついた格調高い作である。三年目を迎えた時波山は「永華彩磁唐花文花瓶」を出した。大きな釉ひびがあ

り、唐花を写実風に彫り出し、刀もすぐれ、当時の評にも「これだけしつかりした技巧を持った人もない」とか「かつ洗練された明るさがあり、文様にも生彩がある」などと賞讃している。(美之國昭和四年十一月鈴木重夫、渡辺素舟)

この時波山は工芸部の主任審査員をしていた。権威ぶることなく、謙讓で、作品に対しては厳しく作家には思いやりがあり、審査員としても立派であった事が知れる。

昭和六年(一九三一)第十二回の帝展に出品した「彩磁柘榴花瓶」は柘榴を従来の写実とはやや趣を変え、図案化して彫出したもので、新しい趣であるが、格調高さを失わない出来であった。この時代の日本の陶芸会のあり方に非難の声も高かったが、波山の図案のあり方や、作品は新しいものを常に人々に感じさせていた。第三回到「花草文彩磁」十四回到「黄飴蓋花瓶」を出品した。

波山は帝展に毎回出品した。形にも、文様にも常に工夫、変化を求め研究をおこらなかつた。これは常に賞讃をうけるのにあたいするものであつた。

年齢的にも五十代の後半になり、円熟の域に達していたと見るべきであろう。彩磁の他にも青磁、白磁も作り、特に青磁は一段と進歩を見せた。茶入、茶碗類も焼いた。これらは彩磁等には及ばないが、天目茶碗は注目された。

波山は帝展と共に、東陶会でも活躍した。東陶会は関東在住の陶芸家達が団結を計り、研究、発展に努め、新時代の陶芸界に寄与するように昭和二年(一九二七)に生まれたものである。東陶会も十週年を迎える頃には盛んになった。そこに至るまでに波山は並々ならぬ力を注いだ。当時の美術雑誌にも東陶会の主体は、板谷波山で

あり、帝展の工芸が知られると共に波山の名も広まり自ずと東陶会の名が知られるようになった、という記事がみられる。

この他波山は昭和八年(一九三三)から郷里の高齢者に毎年自作の鳩杖を贈るのを行事として八十才まで続けていた。その数は三一九本に達したといわれる。このように波山は作品に対してだけでなく人々にも暖い心を向けたのである。

昭和十五年紀元二千六百年としてその奉祝美術展覧会が開催された。二、三の団体を除いて美術のすべての分野の団体と部門が総合され、当時には珍らしく日本美術界全般の作品が、一堂に集結された。波山は「彩磁山草文水差」を出品した。これは山苺を図案化し、胴に彫つたもので当時この作品を評して、小品の中の芸術性というものが新たな見方となり、また伝統にこだわらない形を作るという事に注目された。

また十七年の文展において波山の出品作「磁彩延寿花瓶」は胴全面に精巧な青海波を刻し、二方に窓をあげ白地に桃と靈芝の延寿文を薄肉であらわしたもので、精緻な作風を示すものとしての代表の一つに挙げられる。

この昭和十年代の波山の作品を見ると、毎年の展覧会には主に彩磁あるいは窯変を出品していた。また青磁、白磁、永華磁、蛋壳磁などもみられる。

十年の帝展、十三年の文展にも出品し、十三、四年頃のものは殊に優れ、辰砂も濃麗な花瓶を十二年頃に作っている。大きな釉ひびのある永華磁にも優れたものがある。また蛋壳磁という光沢の鈍い卵殻色の釉をかけたものもこの年代に焼いている。青磁も盛んに作つた。以前より形も整い釉調もよく、完成期にあつたと思われる。

十五年の作「下蕪花瓶」は我国にある青磁の中でも釉色が最も美しいといわれる国宝の下蕪花生を写したものであるが、形も端正で、粉青色の釉調もすばらしい。十七年の文展には、しばしば焼いた白磁を出品している。十四年に作った「梅花香合」などは小品ながらも、格調の高さがうかがえる作品である。

茶碗は大正の終り頃から試み、昭和九年（一九三四）の帝展にも出した。この十年代には色々な天目茶碗を作り、一段の進歩を見せている。十六年には当時の窯変研究の産物としての辰砂釉をかけた茶碗も焼いている。

波山は作品に厳しくこの茶碗においても意に満たないとして棄てるところの作品を、出光佑三氏が余り勿体ないので無理に持っていたところから「命乞」と銘されているものもある。このような態度は、非常に作品に厳しい波山を物語るものである。

この年代にも、意匠の資にと相変らず写生などを盛んにおこなっている。この態度は明治から絶えず、これが波山の精妙な文様を生出す源である。

昭和十三年より戦没者（郷里）の遺族に自作の観音像や香炉を贈ってその霊をなくさめることにし、途中病気で四、五年中絶したが、全遺族に贈るまでは死ねぬとし、志をつらぬき三十一年（一九五六）とうとうこれを完了した。その数二八一体という。

昭和二十年（一九四五）四月の空襲により田端の工房が全焼したため、郷里茨城県下館の生家に疎開した。如何なる時にも波山は仕事を忘れず、筑波郡菅間村洞下に東陶会の会員である宇田正雄の窯があり、そこに仮工房を設けて制作を続けた。家から十五、六キロある道を七十才も半ばをこした老体をリヤカーに托して通ったとい

う。洞下では二、三回焼いているが、一回に九点位で、茶碗などの小さなものが主であった。

疎開中は写生をよく行い「花果粉本」と題する写生帖にも、草花、蝶など身近な目に触れる色々なものを描いている。

昭和二十年（一九四五）大戦終了後、工芸界は産業工芸の重視、西洋の新しい工芸の摂取に活気を呈しはじめたが、二十一年（一九四六）従来の文展、即ち文部省美術展覧会は日本美術展覧会と改め、三月に第一回、十月に第二回開催した。材料などの不足のためまだまだ振わなかった。波山は第一回展に審査員となり「黒鉛瓷仏手柑彫文花瓶」を出品した。この作品は当時どん底にあった陶芸界に大きな勇気づけになったといわれている。第二回にも「彩磁唐花文水指」を出した。この作品は後にワシントンのスミソニアン、インステイテュートで開かれたキルン、クラブ主催の国際陶芸展に出品されている。第三回には「蓮口花瓶」を出品、第四回は文部省の手を離れて、日本芸術院の主催で行われた。波山は牡丹文を刻した白磁を出品し、第五回には「彩磁草花花花瓶」を出品した。

昭和二十五年（一九五〇）茨城を引揚げ東京田端のものとの場所に工房を再建した。翌年第七回日展には「蛋殻磁瑞芝文花瓶」第八回は「蛋殻磁呉須絵鯉耳花瓶」第九回には「彩磁桔梗文水指」第十回は「黄磁枇杷文花瓶」第十一回には「彩磁桜草文水差」第十二回「銅耀磁唐花花花瓶」を出品した。このように波山は名品を次々と日展に出品した。昭和三十三年（一九五八）には日展運営会が解散し、社団法人日展が結成され、十一月には第一回日展を開いた。しかしこの展覧会から波山は出品していない。

この頃から日展にも、新しい欧米工芸の影響をうけた作品、殊に

抽象的な傾向が目立って来るようになった。こうした作品などに対して、波山は自分の領域ではないとしながらも、それを作る若い作家達には温い心で接していたという。

永年に渡って郷里につくした功績によって二十六年下館市名誉市民に推挙され、二十八年には日本芸術院会員吉田三郎氏の制作になる胸像が母校下館小学校庭に建てられ、同年十一月三日文化勲章及文化功勞年金を受賞した。これは工芸家としては初めてであった。

三十一年五月には水戸市において大観、波山展が開催された。

また三十三年（一九五八）八十七才で初めて個展を三越本店で開いた。その折の「青磁瓢花瓶」「彩磁花禽文水指」は優作であった。

三十四年十一月には米寿を記念して回顧展が三越本店において開催された。その展覧会には明治四十四年から昭和三十四年に至る間の代表作品百余点が一堂に並べられた。この記念展にちなんだ新作も陳列された。長い間の陶技の鍛えと冴えに高い格調があふれ、あらためて目を見はらせられたと言われている。

しかしこの時、波山は自分の勉強不足がまざまざと知らされたといつて、八十八才にして新たな研究への志を持ったといわれている。そして波山は写生、図案などの研究を行い、以前から幾度となく写生しているものを、あらためて慎重に描き、又高齢にもかかわらず西洋映画を見たり、銀座を歩いている女性の服装からも、勉強の材料を得た。

三十六年九十才で清朝彩磁風の「彩磁仙桃文茶碗」を三十八年には「青磁風耳花瓶」を作っている。最後の作は波山がしばしば図案に使用した紫陽「彩磁紫陽花文茶碗」である。小品ではあるがむずかしい曲面に大振りな紫陽を描いてあり、高い技巧がしのばれる。

三十八年一月、五十年來波山の手となり足となって働いた現田市松を失い、仕事の上でも精神的にも打撃をうけた。

波山はこの年の春から病氣勝ちとなり、十月に入って容態が悪化し、十月十日午後五時十分、ついに永い生涯を終った。

その病院生活の時も常に制作への心を忘れず、見舞にもらった花を見ては写生をし、陶芸の事を考えていたという。

参考資料

- 一板谷波山伝（茨城県発行）（昭和四十二年）
- 一米寿記念展発行資料（昭和三十四年）
- 一大観波山展発行資料（昭和三十一年）
- 一板谷波山（美術日報発行）（昭和十五年）

結び

板谷波山は近代陶芸の先達であり、巨匠であった。波山作陶生活は明治三十六年田端に窯を築いてから六十年を数え、寡作で年に平均二十点位しか焼かなかつたというが、それでも千点を越す作品があるとと思われる。

明治末期陶芸界が沈滞し、改革を迫られていた時に、新たな窯技を開拓し、伝統的技術を研鑽し、また独自の創造的文様をつぎつぎに示し、大正から昭和にかけて陶芸界に新たな道を開き進展させた。

作風は大した変化がないといわれるが、波山が思い切った転換や、目先を変えたような変化をせず、一作一作に形、文様、釉薬などを奥へ奥へと深くつっこみ研究し、むしろ古来の伝統をうまくひき継ぎ、そこに波山の独自の文様、技法をおりこみ着実に名品を作

り上げたといった方が良いと思われる。

初期において波山の一つの傾向として、マジョリカ陶器の影響が挙げられるが、これは作品として表現するより、むしろ文様の研究に、又洗練された色彩を作り上げる段階であったと考えられる。また基礎となる文様の写生をよく行い、外国雑誌から新しさを学び、日本古来のものからは日本的なものといったようには幅広い面から一つの題材を研究し、図案化している。

色彩においては淡色、古典色といわれるものを多く使用し、いわゆる原色やあざやかなものは見られない。その理由の一つとして考えられるのは波山の最大特色である葆光彩磁が、うす絹につつまれたようにと、表現されるがごとくに、淡いやわらかさを表現することを好んだからだと考えられる。

文様としては、花鳥が多く特に草花の文様を好んで使用しているようである。その中でも初期、中期、晩期を通して使用しているものでは唐花、紫陽、牡丹、梅、桃などが目立って名品に見られる。形において青磁、白磁など文様のないものには中国の磁器の影響が大であったと思われる。中国陶器の研究のため毎日博物館へ通って形の研究を行って身につけたようである。例えば国宝となっている宋時代の青磁下燕花生や青磁鳳耳花生などをそっくりそのまま伝える作品を作っている。

また文様を中心としたものは、波山の研究の成果とも思われる、独創的な形に図案をほどこしたり、図案に合せて形を考えるとといった傾向は晩年になると一層顕著となった。全体の形としては花瓶、香合、水指などは中国のものの研究の結果生み出されたものと思われるものが多い。

水指は波山の作品の中でも名品が多いといわれるだけあって、他に類を見ない若々しい新鮮な図案と構図が表現され、全体に品よく草花を調和させたものが多い。

作者としての波山は大きな業をなし、多くの名品と共に功績を挙げた人である。又生活も有名人となった時でも高ぶらず、その態度は作品に見られるように、じみなものであった。しかし父親としての波山を見た時、次男の佐久良氏は「おやじは作者としては立派だったかも知れないがしかし父親としては、制作意欲に燃えているため日常生活を考えず、子供達はずい分つらい思いをした。又おやじは死ぬまで作陶への心を失わず病床でも写生をしそれを作品にするといって、子供のように楽しみにしていた。一時退院するやいなや作陶に入り作品化させようとした。あの心意気にはわが父ながら感心する。陶芸のために病気をこらえていたのでしょう」と語っていた。このような話からも波山がいかに作陶生活に一生を捧げていたかがしのばれる。その志は常人ではつらぬき通せぬものである。晩年の作品に見られるすどい刻りとなって表現されているのである。例えば常識では考えられないような九十才の高齢においても一刀の乱れも見せなかった。波山の作品には常に年齢を感じさせない若々しさがあつたといえよう。波山の作品がいつの時代でも若々しく新鮮であつたことは常に心を燃しつづけていたからであらう。

また陶芸界においては、精妙な薄肉文様をほどこし、マット釉をかけた、壺や花瓶類などその刀の冴えは瑞麗にして高雅な趣には彩磁に優るものがあるといえよう。近代の陶芸界はこの陶彫の影響を受けたものが大きいと考えられる。

略年譜

明治	年号	西曆	年齢	略歴	歴史	主要作品	備考
五		一八七二	1	三月三日茨城県下館市甲八六番地に生まれる 本名嘉七、父善吉母宇多の三男 七月父善吉歿す 下館小学校卒業 上京し成城学校（陸士予備校）に入学			父は半癡と号し風流文事を愛し南面を描く 竜池会、日本美術協会と改称す 東京美術学校設置の勅令発布 東京美術学校開校 日清戦争
一五		一八八二	11				
一八		一八八五	14				
二〇		一八八七	16				
二一		一八八八	17	陸士予備試験の体格検査に不合格軍人志望を断念 下宿の近所の河久保正名の画塾に通う			
二二		一八八九	18	九月東京美術学校彫刻科に入学			
二七		一八九四	23	東京美術学校彫刻科を卒業 同校予備校美術学館 彫刻科に教鞭をとり同時に攻玉舎中学図画教師を兼ねる		卒業制作「元禄美人」木彫	
二八		一八九五	24	瓜生岩子の媒約により福島県坂下町出身の鈴木まると結婚 新居を本郷森川町に構える			
二九		一八九六	25	七月二十九日長女百合子生まる 九月白井雨山氏の勧めにより石川県立工業学校木彫科主任教諭として金沢に赴任			
三一		一九九八	27	十一月二十三日長男菊男生まる 彫刻科廃止のため辞職を決意したが校長の要望により陶磁器科を担当この間約七年焼物の研究に没頭 勤川と号す			岡倉覚三東京美術学校長を辞職 日本美術院を創立

三三	一九〇〇	29
三四	一九〇一	30
三七	一九〇四	33
三九	一九〇六	35
四〇	一九〇七	36
四三	一九一〇	39
四四	一九一一	40
大正		
二	一九一三	42
三	一九一四	43

九月母宇多子歿す（六十九歳）
四月二十三日次男佐久良生まる

十一月二十三日三男紅葉（友義）生まる

平野耕輔氏の指導により三方焚口の洋風倒焰式丸窯を夫人まると二人で築き一年三ヶ月で完成す
ロクロ工人として深海三次郎（有田出身）工作を手伝う

四月初窯を焼き上げ好成绩を得る
三月二十三日四男松男五男梅樹生まる
一月第二回窯は地震のため完全な作品は一点のみ

東京勸業博覧会美術部に出品三等賞を受賞
第一回東京美術工芸展審査員となる

深海三次郎中国に招聘され現田市松（石川県小松出身）後任となる

九月窯業共進会へ出品一等金牌を受く
東京勸業展審査員となる

七月東京高等工業学校嘱託を辞職
マジョリカ陶器を製作
夫人まる協力作銘玉蘭を用う

東京府工芸展に花瓶を出品八百円で東京府買上げとなり名声を上げた。このころインド、ペルシヤの更紗文様に興味をもち図案に取り入れる

三月東京大正博覧会審査員となる
出品作宮内省買上げ

「フキの葉文花瓶」
「菊花図飾皿」
「蝶貝名刺皿」
「貝水指」
「彩磁花鳥文花瓶」
「彩磁花鳥文花瓶」
「貝水指」
「彩磁花鳥文花瓶」

パリ万国博覧会
正木直彦東京美術
学校長となる
日露戦争

文部省美術展覧会
（文展）創立

日英大博覧会

第二回東京勸業博
覧会 岡倉天心歿

農商務省の工芸展
開催
第一次世界大戦

四	一九一五	44
五	一九一六	45
六	一九一七	46
八	一九一九	48
九	一九二〇	49
一〇	一九二一	50
一一	一九二二	51
一二	一九二三	52
一四	一九二五	54
元	一九二六	55
二	一九二七	56

昭和

東京工芸図案会審査員となる
シカゴ市博覧会に出品受賞す
大正天皇御大典に際し東京市献上品東京十五景の
うち磁製扇面浅草観音風景額を作る

日本美術協会展覧会に出品
金牌第一席を受賞

三月平和記念東京博覧会審査員となる
出品作宮内省買上となる

十一月摂政宮御成婚を祝し久邇宮家献上の「彩磁
瑞鳳文花瓶」及び全国文武官献上の「彩磁松竹梅
花瓶」を作る

大正天皇御成婚二十五年奉祝の文武官献上の文房
具中硯屏および筆架をつくる
小型磁器焼成窯を築く
工芸家にて工芸済々会を結成し十一月第一回展を
高島屋で開く

東京府美術館記念聖徳太子奉讃展覧会審査員とな
る
六月帝國美術院展覧会に工芸部新設されその審査
員、七月帝展審査員となる

「笹葉文大花瓶」

「白磁八ッ手葉影文花瓶」

「葆光彩磁珍果文花瓶」

「白磁瑞獸香炉」

「葆光彩磁紅牡丹文花瓶」

「彩磁獅子騎乗」

「葆光彩磁草花文花瓶」

「白磁宝相華影文花瓶」

「窯変天目茶碗」

「肩衝茶入」

「紅瓊磁花瓶」第一回工芸済々
会展出品

「葆光彩磁呉須模様鉢」

「葆光彩磁葡萄酒香炉」
第二回工芸済々会展出品

「水華磁瑞花文大花」

「葆光彩磁陶果文大花瓶」奉讃
展出品

「紫金磁珍果影文花瓶」

帝國美術院創立

関東大震災

帝國美術院帝展に
第四部美術工芸を
加えることを決議
す

日本工芸美術会
創立

東京府美術館竣工
帝國美術院明年度
より第四部設置の
準備を始む

一三	一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三
一九三八	一九三七	一九三六	一九三五	一九三四	一九三三	一九三二	一九三一	一九三〇	一九二九	一九二八
67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57

茨城工芸会を主宰し現在に至る
関東在住の陶芸作家の団体東陶会結成されその會長となる

九月帝展審査員となり
出品作は院賞を受く

帝国美術会員となる

十月フランス政府よりバルム、オフィシエ・アカ
デミー勲章を贈られる

帝展出品の「彩磁草文花瓶」政府買上

帝展出品作政府買上

十二月帝室技芸員を拝命

帝国美術院改組に際し会員となる

六月帝国美術院、帝国芸術院と改組、会員となる

(帝展出品)

「彩磁草花文花瓶」

(帝展出品作)

「白磁批把彫文花瓶」

「彩磁唐花文様花瓶」

(帝展出品作)

「彩磁草文様花瓶」

(帝展出品作)

「彩磁石榴文花瓶」

(帝展出品)

「葆光彩磁草花文花瓶」

(帝展出品)

「黄鉛瓷花文壺」

(帝展出品)

「葆光彩磁草花文花瓶」

「窯変鶴首花瓶」(帝展出品)

「淡紅磁四方香炉」

(文展出品)

「彩磁名華文花瓶」

「朝陽磁鶴首花瓶」

(文展出品)

六和会

帝展第四部美術工
芸設置

東陶会第一回展

満州事変

帝国美術院官制を
廢し新官制による
会員任命す

東陶十週年春新帝
展(日本画)彫刻
日華事変

秋文展
帝国芸術院官制を
布く

一四	一九三九	68
一五	一九四〇	69
一六	一九四一	70
一七	一九四二	71
二〇	一九四五	74
二一	一九四六	75
二二	一九四七	76
二三	一九四八	77
二四	一九四九	78
二五	一九五〇	79
二六	一九五一	80
二七	一九五二	81
二八	一九五三	82

紀元二千六百年展覧会審査員となる

学士会館において全工芸美術家による古稀の祝賀宴を受く
長岡市の有志により古稀記念の作品展開催

四月戦災により住居工房全焼下館市に移住し茨城県筑波郡洞下に仮工房を設け制作を続行

東京旧地に工房を再建 現案を復興

三月下館市名誉市民に推挙される

六月下館小学校に胸像建立される 十一月文化勲

「彩磁水差」 (文展出品)

「彩磁山草文水差」

(二千六百年展出品)

「彩磁草花文花瓶」

(文展出品)

「白磁延寿文様花瓶」

(文展出品)

「黒飴瓷仏手柑彫文花瓶」

(日展出品)

「彩磁唐華文水差」

(日展出品)

「白磁牡丹彫文花瓶」

(日展出品)

「凝霜磁蓮口花瓶」

(日展出品)

「蛋殻磁鳳耳花瓶」

「彩磁美男蔓水指」

(日展出品)

「祥桃瑞芝文花瓶」

(日展出品)

「蛋殻磁貝須繪鯉耳花瓶」

(日展出品)

「彩磁桔梗文水差」

文展中止、紀元二千六百年奉祝美術展開催
大太平洋戦争

終戦

従来の文部省美術展覧会は日本美術展覧会となる
新憲法施行
日展、日本美術院の主権により行われる

二九	一九五四	83	章を受く 三月茨城県名誉県民に推挙される	(日展出品)	日展運営会解散 社団法人日展を結 成
三〇	一九五五	84	五月水戸市にて大観波山展を開催	「黄磁批把彫文花瓶」 (日展出品)	
三一	一九五六	85		「彩磁桜草文水差」 (日展出品)	
三二	一九五七	86	八月夫人まるの病歿、八十九歳 六月日本橋三越にて作陶展	「鋼耀磁唐花花花瓶」 (日展出品)	
三三	一九五八	87	四月東京会館において米寿祝賀宴催される 十一月三越本店において波山米寿展を開く	「簸釉草文花瓶」 (日展出品)	
三四	一九五九	88	十月「美術学校時代の岡倉先生」を「国華」(八三五号)によせる	「凝霜磁鯉耳水指」(東陶会)	
三五	一九六〇	89	一月六日 現田市松を失う(七十九歳)	「淡黄磁香炉」米寿展	
三六	一九六一		四月二日 順天堂病院に入院	「青磁袴腰香炉」	
三八	一九六三	92	五月十日 手術を行う 六月二十日 退院 十月十日 午後五時十分逝去。	「做均磁唐草文花瓶」	
				「彩磁仙桃文茶碗」	
				「青磁鳳耳花瓶」	
				「彩磁紫陽花花文茶碗」	